平成30年度第２回京都府総合教育会議議事録

１　日　時　　平成30年11月９日（金）午後１時から２時30分まで

２　場　所　　京都府立山城高等学校　本館１階　大会議室

３　出席者　　西脇 知事、橋本 教育長、平塚 教育委員（教育長職務代理者）、
上原 教育委員、安藤 教育委員、千 教育委員、小畑 教育委員

４　議事内容

（１）開　会

（古川文化スポーツ部長）
平成30年第２回の総合教育会議を開催します。本日は最初に山城高校の概要と府立高校の取組などをお聞きして校内視察を行っていただき、意見交換をさせていただきたいと思います。それでは、開催に当たり知事から一言御挨拶をお願いします。

（西脇知事）
皆様こんにちは。お忙しいところお集まりいただきありがとうございます。９月の会議では、私も初めてでしたので、新学習指導要領の英語教育や地域の教育力をどうしていくかといった課題を聞かせていただきました。
本日は、質の高い文武両道を目指しておられる山城高校の現場で、たくましく社会を生き抜く人材をどう育てていくか、子どもたちが安心して学べる環境をどのように作るかという課題について現場を見ながらの意見交換、併せて京都府全体の取組についても皆様と意見を交わしたいと思います。
京都府は子育て環境日本一を目指しておりますので、京都の教育の質をさらに高めるためには府民視点で考え、知事部局と教育委員会が一体となって取組を進めていかなければいけないと思っております。一層議論を深めたいと思っております。よろしくお願いいたします。

（２）学校概要説明

（古川文化スポーツ部長）
ありがとうございました。それでは視察に先立ちまして、山城高校と府立高校の取組について山城高校の校長でありますとともに、京都府立高等学校校長会会長の山口校長にお世話になります。

（山口校長）

皆様こんにちは。本日はようこそ山城高校に、雨で足下の悪い中、足をお運びいただきありがとうございます。前半は山城高校について、後半は府立高校の取組や課題等について全般的なお話をさせていただければと思います。

御手元に学校要覧、中学生向けに作っておりますスクールガイド等を用意しました。要覧等とスクリーンを使いながら説明をしていきたいと思います。

本校の沿革は、その後の関係で繋がりのあるところだけお話しますが、第五中学として約110年前に設立され、その後第三中学になり、戦後に山城高校になりました。昭和46（1971）年、今からおよそ50年前から聴覚障害のある生徒を受け入れる特徴を持った学校としてその活動を続けております。昭和60（1985）年が生徒の急増期で、府立高校があちこちにできた時期に、本校も校舎を建て替えて約40年が経過しております。その後平成19（2007）年に文理総合学科という専門学科を設置し、それに先立って平成13（2001）年に、今いる本館を改築しまして20年弱経っている状況で、平成26（2014）年には普通科にコースを設置しております。

本校の教育方針ですが、５つ挙げております。普遍的な内容としつつも、不易流行という点で、昨今の状況とかかわりまして、特に２番目の自主、自立、共生の精神を養い責任を学ばせる、すなわち、生徒にいかに自立を学ばせるか、責任ある態度を涵養するかに焦点を当てて今年度は取り組んでおります。自立という自覚が芽生えた段階で責任も学ばせたいという取組に移行していこうと思っております。

本校の現状ですが、１学年９クラス、３学年で27クラス、生徒数1,080名が学ぶ非常に大きな学校です。その中で文理総合学科１クラス、普通科８クラスを設けております。

普通科の中には標準クラスであるアドバンストコース、発展クラスであるスーパーアドバンスコースを設けております。普通科の８クラスは発展クラスが２～３クラス、生徒の希望で年によって違うのですが、それに従いまして標準クラスが５～６クラスになっております。

文理総合学科ですが、文系理系を問わず、大学のリベラルアーツ的要素を学ばせる、特性を見つけてさらに伸ばす、あわせて英語コミュニケーション能力をきちんと指導していくことをコンセプトとして置いている専門学科です。普通科は学校行事や部活動を通して豊かな感性を育むことを目標としています。本校の元気で明るい、ウォーターボーイズやダンス部に代表されるように仲間と充実した高校生活を過ごし、自分の存在、人間的魅力を育成する普通科を目指しております。

続きまして本校の大きな取組についてお話したいと思います。２つの普通科、専門学科の両方で、授業でスマートフォンを使っています。今、京都府でもICTの整備等は話が進んでいると伺っておりますが、それまで手をこまねいているのでなく、本校の生徒は99%スマートフォンを持っておりますので、授業の中で活用する取っ掛かりとしております。教員がICTをどのように活用するのか検証にもなりますし、生徒にとっても単にゲームやSNSの道具だけでなく、携帯できるコンピューターとしていかに上手に使うかという発想で取り組んでおります。ただ、保護者のお金を使うわけですから大半の保護者には同意を得て授業で活用しております。

今年予算をいただき、研究指定的に６教室にプロジェクターやWi-Fi環境の整備を行っ

ていただきました。この後で見ていただけると思いますが、教員の活用が進んでいます。

新学習指導要領について知事からお話がありましたが、英語４技能についての大学入試が実施される中、民間試験の全員受験をしております。府教育委員会から１人当たり半額程度の補助をいただいて実現しておりますので、引き続き予算面のフォローをいただけると、１・２年生のすべての生徒が受験し、大学受験につなげていけると思っております。

このほか、英語環境、英語の４技能に関する取組としては、近くにある立命館大学に来ている海外留学生で英語が堪能な方を学校に招いて、月一回授業を補助いただいており、予算はPTAでカバーしていただいておりますのが現状です。

英語だけでなく、視野を広げたり豊かな環境の中で新たな価値観を見いだせる点で、シンガポールとは毎年相互交流をしておりますし、ドイツとは１年ごとに行ったり来たりするなど姉妹校のような取組をしています。海外の留学生を積極的に受け入れるのも本校の大きな特徴かと思います。昨年は中国から４人が来てくれましたし、今年はガーナと台湾から留学生が１人ずつ来ています。その子たちが１つのクラスで１年間ずっといてくれます。海外を近くに感じられる環境を作り、生徒を刺激するのが私の仕事だと思いますので、こういったことを積極的に取り組んでおります。

先ほど申し上げました聴覚障害のある生徒への対応ですが、聞こえの保障として耳が不自由な生徒のために様々な取組を行っています。例えば文化祭の演劇の発表は、台本を文字化して横で流すことで、耳が聞こえない生徒も見ながら楽しむことができます。団体鑑賞もそうですし、授業で使うビデオ教材もビデオスーパーを作成して提示しております。一方で、先生の言葉を文字化するシステムがあり、費用がかかりますが府教育委員会から予算をいただいている状態です。手話弁論大会も、生徒の障害に対する理解のために行っており、来週も実施する予定です。こうしたことで、高校３年生に４人、高校１年生に１人いる生徒に対応しておりますが、こうした対応は、今後はコンピューター環境・人工知能などのほか、人工内耳が発達する中で、時代とともに変わっていくのだろうと思います。

本校の建物については、様々な問題があります。要覧の最後に本校の図面と模型の写真があります。正門に入っていただきまして玄関を入っていただき、赤い矢印に沿って歩いていただきましたが、今いるのが会議室になります。写真を見比べていただければわかると思います。先ほど言いましたとおり、高校の急増期に作られた校舎、W館、N館、プールは30年～40年前に作られたものを今なお使い続けているのが現状です。さらに、専門学科ができたときに建てた体育館と本館はできてから15年～20年弱経った建物です。例えば、今年度ようやくW館のトイレの改修を行いましたが、仮設トイレを付けてもらうために工期が伸びてしまうというのが現状で、学校としても苦慮しているところです。

体育館は建ってまだ十数年ですが、屋上にテニスコートがありまして、その関係なのか雨漏りがします。プールについては濾過器が設計から施工までトータル４年ほど掛かっていて、ようやく今年修理が叶うようになりました。学校は丁寧には使わせていただいているのですがいろいろな課題が存在しているというところでございます。

続きましては府立高校全体の話をさせていただきます。京都府の入試制度が改正されてから4年が経ちまして、当初は中学の進路指導に若干、戸惑いが見られ、混乱があったと記憶しておりますが、５回目となりますと各校の立ち位置が明確になってきてそれぞれの課題が明確になってきました。少子化の中でそれぞれの地域の学校のあり方・立ち位置等

についても考える必要が出てくるでしょうし、いろんな学力の生徒を抱える中で、それぞれの学校の課題がある。よく教育面においては「個に応じた教育」とい言いますが、教育施策についても各学校に応じた教育施策１本では済まないような実態を京都が迎えているのかなと思います。高大接続への対応ということで英語や記述式へのテストへの対応も問題になってきます。同時に、新学習指導要領に対応して次年度から総合的な探究求の時間が移行期間として本格的になります。教員の準備も難しい。そのためには時間が必要だと思いますし、カリキュラムマネージメント、つまり日々の授業の見直しが積極的に行われることが学習指導要領に規定されました。

この中でパラダイムシフトが起こっているのは、知識をどう教えるのかというより、どのように学ばせるのかという、スキルベースでどう教育を評価するのか、どういう風に授業を組み立てていくのか、大きな転換を求められているのが今の学校現場だろうと思っております。

一方で、成人年齢の18歳への引き下げの問題があります。今の中学２年生が高３になったときに起こります。それには様々な課題があろうかと思いますが、どういう課題が本当にあるのか思いつくところがありますが、トータルとしてどうなるのかはまだ見えないところですので、こういったところで議論が絶えないというのは普通になると思います。そうした様々な変化がある中で数年経ちましたが、府立高校特色化推進プランネットワーク事業が府教育委員会で行われております。スタートはサイエンスネットワークでしたが、全部で４つのネットワークを立ち上げましてそれぞれ取り組んでおります。生徒が発表し、場合によっては英語でディスカッションするところまでいっておりますが、この取組はSSHやSPHの予算が背景にあって行われていることもありますが、新学習指導要領の実施に向けて非常に有意義なものと思っておりますので、ぜひ継続いただけるようお願いしたいと思っております。

それからこういった様々な転換を迎える時期におきまして、マンパワーが必要になると思います。パラダイムシフトにどう対応していくのか、そこには人が必要だと思うのですが、一方で先生に無理をいうわけにはいかない、働き方改革が同時に進んでいるバランスの中で現場をどうコントロールするのか、というのは私たちの頭の痛いところです。

新学習指導要領には、ICTの活用が盛り込まれており、平成34年度から始まります。ほとんどの学校にはこうしたものがありませんので､先生方がその準備や研修ができません。平成34年度に間に合うように整備するのではなくて､きちっとした形で準備できるような、できるだけ早い段階でICTを整えていただければ、教員も積極的に取り組んで準備ができるかなと思っているところです。少し長くなりましたが私からの説明は以上です。

（古川文化スポーツ部長）

今のお話を含めた意見交換を後でさせていただくということで、校内の視察をお願いしたいと思います。

＜校内視察＞

（３）意見交換

（古川文化スポーツ部長）
　それでは視察と先ほどのお話を踏まえまして、これから意見交換とさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

（西脇知事）
　ICTについてお話したいのですが、生徒がスマホを99％持っているということで、低年齢なほどICTに慣れている。一方教師の方が慣れていない。本当のAI・IOT人材がいるともっと次元が違うと思うのですが。今見たのは授業環境、授業の効率化ということなのでしょうか。皆様の感想は。

（平塚委員）
　こちらは授業の効率化のような感じですね。ICT自体にお金がかかるので整備が難しいと思うのですが、電子黒板などのICTの活用はもともとアクティブラーニングから来たものですから、生徒にタブレットなどを渡して先生が一方的に教えるものではなくて子どもがタブレットなどをもっと利活用するような環境が理想です。ICT環境が整うのを待っていられないので活用したいと仰っていたのですが、スマートフォンをどのように使われるのか気になりました。

（山口校長）
　スマートフォンはいくつかの使い方があります。課題演習をスマートフォンで答えさせて、教員に送信すると正誤が見えますので、採点したものを見ると生徒がどれくらい理解しているのか瞬時にわかります。ソフトを入れているのですが、生徒が入力したものを把握して黒板に提示することで、どの子がどんな意見を持っているかや、回答をしているのかわかります。生徒を呼んで黒板に書かせる代わりに一斉に見ることができます。
　それと、いわゆる調べ学習です。どんな記事が出ていたのか、という使い方もできますし教科の特性や教員のスキルに応じて様々に使っているという状況です。

（安藤委員）
　ICTの活用を積極的にというようなお話が文科省から下りていると言う話はもちろんなのですが、実際に私たちの生活では家庭の中の方が学校の中よりも最先端のものが存在しており、高校生は社会に一番近い年齢層なので、そういったものに触れる機会がたくさんあるのはいいと思います。スマートフォンや電子黒板は画期的でいいと思います。

（西脇知事）
　教師の人は付いていけていますか。

（山口校長）
　教員の得意、不得意がはっきりと分かれます。年齢に関係なく、コンピューターに興味のある年配の先生方は付いてきていますし、その話題になると口を閉ざす先生もいます。個人差ですね。それも年齢が若いから必ずしもできるというものではなく、スマートフォンを扱えるのと、プロジェクターで提示するにはコツがいりますので、そういうことがわかっていらっしゃる方とそうでない方とが出てきます。そういう教員側のスキルを高めていくというのは求められていくと思います。

（小畑委員）
　私もICTを活用した教育で大事なのは、そういうツールを使うことで何ができるのかを勉強していくことだと思います。
　例えばインターネットでも画像のやりとりができる。そうすると、時差もあるかもしれませんが、ドイツの姉妹校と日本とを結んでというように、違う言語を話したり、違う人種の人との一体感を実感できるようなことに使えば非常にグローバルな世界を実感することができるのもICTの活用だと思います。
　それからエクセルでも、大きな表でも一つの変数を入れると全体が大きく変わる。いくつも表をつけていくとそれぞれの意味のある表の数字が変わるのは、昔、やり始めた時にものすごく感動してのめり込んだのですが、本当に大事なのはそこから出てくる数字を解釈してどう使っていくかで、そこに至らないとICT化しても意味が無い。そういうツールをどう活用したらどんなことができるのか実感させたり、出てきた変化する数字の意味を考えさせる教育をしないとICTを使える人間は育たない。AIもツールだから人間が使わないといけない。使っていく人間になるという意識を持たせていくことが非常に大事だと思います。

（千委員）
　その通りだと思うのですけど、ICTも重要なことだと思うし、子どもたちがそれを使いこなせるようになるべきだと思いますけれども、先生方の才能を埋もれさせてももったいない。そういったことが得意ではない先生方でも、他のことで色々とお出来になる。どこかで折り合いをつけて人の力は偉大なものだと思うから、すべてが機械で終わってしまっては意味が無いと。ただできるのではなくて、機械を使えるようにならないといけないですね。

（山口校長）
　ICT化はもちろん両面あります。生徒のためにわかりやすい授業をしてもらうための面、今言われているのは働き方改革です。私が大学を出た時代にはコピー機が普及するかしないか、大切に１台をみんなで使うという時代でしたが、昔の先生は手書きでガリ版で刷っていた時代からは全く変わってきました。ICTは先生にとっても良い教材を作る一つのツールだと思うのでしっかりとこれから進めていくのは大事だと思います。
　学習指導要領も変わって、教材そのものもデジタルでできています。昔は解説書が出ていましたが、教材もCDなどデジタル化されたものが出ています。やはりそれを使いこなす

ためにはそれなりの設備や機械が必要になってきますし、満遍なく各学校に配置するにはお金がかかります。

生徒のためでもあるし、先生のためでもあるし、両方の面だと思います。先生がそれを使うことで、時間が少しでも短縮できて早く帰れるようになれば、それは素晴らしいと思います。ただ、私の立場でいうと、それは中学生・高校生には大事だと思いますが、低年齢の子どもにはバーチャルの世界よりもグラウンドとか土のあるところで触って遊ばせてから、順序立ててバーチャルの世界に導入していくことが大事だと思います。

最近は、若い人が自分の指で打ち込むキーボードが使えないと言われています。スマートフォンやタブレットに慣れすぎて、就職が決まってから慌ててワードなどパソコン教室に通うそうです。

（西脇知事）

その辺のあたり高校ではどうしているのですか。

（橋本教育長）

高校の情報の授業で、できるだけキーボードに触れさせようとするのですが、日常的に触っているのがスマートフォンですので、スマートフォンの方が慣れています。なかなかキーボードには慣れてこないと思います。

（西脇知事）

一方、低年齢のところでは、スマホやタブレットが繋がりすぎて、生活の一部になりすぎているということはないのですか。

（上原委員）

あります。YouTubeの子育てというのがあります。お母さんがスマートフォンでYouTubeを見せて時間を過ごさせておとなしくさせるという。よくないと思いますが。

（橋本教育長）

いろいろなICTの関係ですが、学びのスタイル自体が、先生が一方的に講義をして生徒が黙って聞いているという従来の形から、主体的に参加したりグループで話し合ったりという形になると、今日、拝見した中だけでも、先生の板書の短縮を含めて授業の中で色んなことをやるのに効率的にICTを使うことで進めることができるなというのは非常にわかりやすいです。

効率性と視覚効果・学習効果という二つの面で効果があることは当然かなと思います。一方で、今日は子どもが全てタブレットを持っている訳ではないという意味では途中の段階だと思いますが、タブレットも個人持ちで一種の文房具のように与えていく方がいいと思います。

例えば、辞書も分厚い辞書があるにしても、皆電子辞書を持たされている時代です。タブレットなども同じ位置付けで、だいぶ安くもなってきましたし、個人で持つことで、学校の授業に持ち帰って予習・復習に使えますし、学び直しに非常に便利です。将来の姿と

してはそうした形で使っていくのがいいと思います。
　先生に関しては、今はだいぶ差があると思うのですが、最初は全然使えない先生が多かった学校でも、かなり校長先生が指導をされて先生全員が使えるようになったということもありました。あまり無理させるのも良くないですが、ある程度同じような力が持てるのが望ましいのかなと思います。先に基本的な整備がされて、少し余裕を持って先生に学んでもらって、しっかりと使えるように計画性を持ってやっていけたらと思います。

（小畑委員）
　教科書がペーパーレスになる時代も遠くないという話ですね。

（橋本教育長）
　デジタル教材の使用も認められましたし、特にこれからの英語は本と同時にデジタルにも対応するようになりました。

（山口校長）
　今日の２つ目に見ていただいた英語の授業では、デジタル教科書の教材を前に提示していました。

（平塚委員）
　タブレットもこちらが提供するのでなく、教科書を学校でまとめて売っているように、そこにタブレットも売るようにするのが理想だと思います。タブレットには辞書アプリもありますから利用していかないといけない。スマホは５年前にこんなになるとは皆想像もしておらず、スマホも電話ではなくて電話も使えるというのが実態です。一方で、世界中の情報が入りますので、それだけに難しいことは難しいと思います。

（西脇知事）
　次に行かせていただきます。子育て環境の関係で、小学校の校長先生が学校側から見ると地域がしっかりしているところにある学校は、連携しやすくていいと仰っていました。実態として、地域から見ても高校と地域との繋つながりは、小学校に比べると薄いのですか。

（山口校長）
　以前は地域性が高かった。入試制度もあるのですが、そうするとPTAが地域の方で構成されるので連携は容易かったのですが、本校の普通科も通学区域が京都市の全部に広がっており、保護者との人間関係が希薄になったと思います。そういう意味で地域とのつながりはかなり意図的に作らないとうまく作れないかなと。以前よりはそういうつながりは難しくなっていると感じています。

（西脇知事）
　高校側から地域にやって欲しいということはありますか。

（山口校長）
例えば取組の関連で、地元の保育所や施設に行って授業で活用させてもらいたいということもありますし、円町駅地域の清掃を企業の方とゴミ拾いをして、朝9時から教員が出て行って、その後、この地域をどうしましょうという話を含めて１時間か１時間半ほどするようなプログラムもあるのですが、地域の中で手を取り合って何かをしましょうというのは学校教育の特色によってうまくいったりいかなかったりすると思います。

（西脇知事）
成人年齢の引き下げが気になっていて､かなり大きな課題が高校に来ると思うのですが、動きというのはそんなに無いのですか。自立してもらうということとかなりパラレルな感じがするのです。

（山口校長）
先日、小学校・中学校の校長会の会長にお目にかかった際に話をしていましたが、成人が20歳から18歳に下がってきたということは高校３年間プラス２年間教育して成人になっていたのが、高校２年生で完成しないと18歳・高校３年生の時に成人にならない。つまり高校生になってから取り組んでいては遅いので、中学校の段階でどこまで大人にできるのか、あるいは小学校をどうしていくのかということを逆算しないと高校だけでは無理ですという話を中学校の先生が仰っていました。

（西脇知事）
要するに今みたいな問題意識は私も何年後かに必ず、成人年齢の引き下げで、高校教育に関係すると思っています。その点で感想があれば。

（橋本教育長）
現実問題として一番気になるのは、独立した法律契約ができる、いわゆる消費者教育があって、これは現実問題として一度考えていかないといけない。高校だけでは厳しいので、中学段階からやらないといけない。知事が気にされている地域とのつながりは、その部分を含んで、ライフデザイン教育の要素を今まで以上にしっかり考える必要があると思います。大人になるためには、ということですね。

（小畑委員）
成人年齢が18になるかどうかもあるかもしれないけれど、高校出て就職する人もいるわけだから、そのことから考えると、必ずしも選挙権が下がったからといって、特別に社会性を教育させないといけない、というわけでもない。これまで就職してきた人は社会性がないまま就職したという話になるわけですね。これまで不十分だったのかもしれませんが。もう少し全体的に手厚くしていけばやっていけるという印象ですけど、同時に職業観とか職業意識や働くことの意味合いを教えていくことで、最近の若年者の失業率が高いとか定着しないことの解決策にもなるわけで、いろんな角度から高校卒業するまでに、職業観・

社会性や社会に対して仕事を通じてどう貢献していくのかを総合的に教育していくことを考えればいいような感じがしています。

（安藤委員）
私はNPOで活動しており、地域の高校生に一緒にやらないかと活動を持ちかけるのですが、高校生が小学生と関わること、それから周りの大人と関わることでコミュニケーションを取りながら育っていく。学校では勉強と職業観などを相互に育てていけば問題ないと思っています。

（西脇知事）
いろんなところで大人というか違う世界との交流をするにはどうしたらいいか。NPOが学校に行くとか。高校生にとって大人との会話って非常に難しいですか？

（安藤委員）
難しいです。

（西脇知事）
そのあたり他世代との交流は校長先生、どうですか。

（山口校長）
今仰ったように、高校生は同学年でつながってしまう傾向が強いです。今、SNSもあって小学校以来の友達と仲が良い傾向が強くて、社会性が広がらない。トラブルを避けるためにとか、自分からつつきたくないということが見え隠れするのですが、高校に行っても大学に行っても自分の世界を広げない。そこは、昔と違って発達を阻害している要因の一つだと思います。おっしゃる通り、異世代との交流は大事だと思いますし、その中で自分が何者か知っていくことになると思います。

（西脇知事）
それは意図的にどこまでできるのか、学校では難しいですか。

（山口校長）
そうです。学校の地域、住んでいる地域や大人や地元の自治会、そういうところが地域の教育力があるとか、地域の活性化とかいろんな問題が生じているのにそこがエネルギーを持っていないので厳しいです。

（上原委員）
私は家庭だと思いますね。少子化というのは１人の子どもにたくさんの大人が関わっているわけです。お父さんお母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、親の兄弟。幼稚園や小学校で運動会をしたら、１人の子どもに６人くらい大人が来るのです。両親におじいちゃんやおばあちゃん、まだ若いおじさんやおばさんが付いてくる。１人の子どもに多くの大

人が関わっているのを感じます。我々の時代より基本的に過保護です。その分、自立するきっかけが遅れている。私は構い過ぎだと思っています。もっと自立とか、自分たちで物事を解決したり行動したりするのは必要です。

（山口校長）
自立するきっかけを失っている、だからこそ本校の校風も自立を成功させたいと思っているのですが。失敗しても条件を作りすぎて失敗から学ぶことができない、失敗することが怖い。だから一歩踏み出せない。ただ、一歩社会に出ると理不尽なことが一杯あります。そこでつぶれていくのでもっと学校でやっておいていいと思います。

（千委員）
家庭でも子どもが少ないと、大人の見る方が多くて、子どもたちが純粋培養され過ぎているのが原因だと思います。

（西脇知事）
運動会や入学式や卒業式でも子どもが王様だそうです。小学生の子どもが一番偉い。そこで自立しろといっても、難しい課題ですがその後の展開には、自立心が大きいと皆さんおっしゃっておりましたね。
大学生と地域との関わりでは、消防団の活動をする学生が若干ですが増えていまして、大学内にサークルができています。就職活動につながるということでボランティアに似たようなこともあるようですが、居住地の地元の消防団に入っている。サークルに入って、地元の消防団に入ってみると４年間ということもあるのか、楽しい。若者が入って活性化したと、受け入れる側が喜ぶのですよね。女性の消防団員も増えています。水防や火事の現場に行くというより、日頃のキャンペーンや火の用心の活動をしています。
高校生でどこまでできるのか、部活もあるのでわからないですが、高校生も他世代と交わりを、本当は地域でできたらいいと思うのですけど。高校生は部活で忙しいですよね。

（山口校長）
そうですよね。９割近く入っているので。自分が社会に育ててもらっているから、社会貢献をどうするかが視野に入って来れば少し価値観が変わるかなとは思います。授業やってクラブをやって親もそれで満足だけど、社会のニーズとしても社会貢献をというような位置付けができると少し行動パターンが変わると思うのです。

（上原委員）
祇園祭鉾も地元に学生を入れてやったらいいかもしれないですね。お祭りはいいかもしれないですね。

（西脇知事）
私も区民運動会は豪華な商品がもらえることもあり、参加しました。本番に出られる人数が時間との兼ね合いがあるので予選もありまして、上位に入れないと出られない。大人

の方が熱心で町内対抗ですからね。年齢別リレーとかあるのです。他世代交流、自立というのは基本的にそういうことかなという気がします。

（橋本教育長）
　逆に、規模が小さい学校で、自分の学校だけの運動会だと淋しすぎるので、区民運動会も合わせて一緒にやるところも出てきていますね。そうすると地域との関わりが出る。

（西脇知事）
　企業も一時期、社内運動会を止めたのに、あまりにも社員同士の交流がないから社内行事として復活したりしています。旅行は難しいけど運動会は一流企業でも復活しています。

（小畑委員）
　社内旅行を始めている職場もあるし、もう一度そういうコミュニティを作る動きがありますね。

（古川文化スポーツ部長）
　お時間が来ましたのでここで終了させていただきます。皆様の意見を反映させていただきたいと思います。本日はありがとうございました。